

長野県

おか や し 岡谷市

外国人市民を、地域の活力へ
～「ものづくりのまち」と多文化共生～



岡谷市の概要

岡谷市は長野県のほぼ中央に位置し、諏訪湖の北西岸に面しています。八ヶ岳中信高原国立公園、塩嶺王城県立公園が囲み、また遠くに富士山を望むこともできるすばらしい景色に恵まれたまちです。古くから交通の要衝に位置し、諏訪地方の中核都市として発展してきました。

明治から昭和初期にかけては製糸業が発達し、生糸の都市「シルク岡谷」として日本の産業の発展を支えました。かつては絹の全国生産量の二五%を占め、欧米にも輸出されました。また第二次世界大戦後は、「東洋のスイス」と呼ばれ、精密工業の都市として飛躍的な発展を遂げました。現在も「ものづくりのまち」として、光学・精密・機械など多様な分野において先端技術が集積し、スーパーデバイス（超精密加工）産地として、その高度な技術は健在です。

また、古くから親しまれた岡谷の太鼓は、今では郷土芸能として定着し、毎年八月には三〇〇人が豪快にそろい打ちをする「岡谷太鼓祭り」が行われます。

さらに日本を代表する童画家武井武雄の童画の世界、その優しさど温もりをまちづくりのエッセンスに取り入れています。

近代スケート発祥の地として、郊外にある「やまびこスケートの森」を中心に、一年を通して多くの市民がスケートに親しんでいます。

また、寒い時こそウナギを食べようと「寒の土用丑の日」を全国に提唱し「ウナギのまち」として、市の特産品であるウナギを使ったユニークな地域おこしに取り組んでいます。

岡谷市に住む外国人住民

岡谷市の外国人登録者数は二〇二三人（二〇〇七年一月一日現在）で、市の人口に占める割合は、約二%です。国籍の内訳ではブラジルが最も多く、これは過去一〇年間変動がありません。続いて中国、フィリピン、韓国、インドネシアの順となります。主に工場で働く日系人労働者や中国などアジア諸国からの研修生、また日本人配偶者などが多数を占めています。

姉妹都市交流

岡谷市はアメリカ・ミシガン州イザベラ群の群都マウント・プレザント市 (Mount Pleasant) と、一九六五年に姉妹都市提携を調印しました。マウント・プレザント市はミシガン湖とヒューロン湖の間に突き出た半島のほぼ中央にあり、デトロイト市の北西二三〇kmに位置しています。市内にはセントラル・ミシガン大学があり、学園都市、農業都市、また中西部の古きよきアメリカを残している都市として栄えてきました。また一九二七年のオイルブームを発端として、ミシガン州の石油の都となり、現在も石油産業が続いています。

二〇〇五年には岡谷市・マウント・プレザント市姉妹都市提携四〇周年を迎え、記念事業が行われました。マウント・プレザント市では、岡谷市から贈呈された四〇本の樹木を、ネルソン公園内の道路沿いに植樹し、この通りを「OKAYA DORI 岡谷通り」と命名し、岡谷市出身の童画家、武井武雄氏がデザインした英文字を使用した道路表示板が掲げられました。また、マウント・プレザント市から岡谷市に贈られたシュガーメープルが岡谷湖畔の公園に植樹され、「マウント・プレザント フレンドシップ・ゾーン」と名付けられ、市民の憩いの場となっています。

岡市は地元の著名人や教職員、一般市民などからなる訪問団を結成して、相互に訪問し、ホームステイをしたり、文化交流をしたりしてきました。二〇〇二年一月には、マウント・プレザント市の先住民二人が岡谷市を訪問し、同市の湖畔公園にて「日の出の儀式」を行いました。さらに、先住民の歴史や伝統文化、芸術作品などを紹介して、岡谷市民との交流を深めました。また高校生生活体験を、



↑マウント・プレザント市にある「岡谷通り」

隔年で相互に実施しています。二〇〇七年八月には、

岡谷市の高校生四人がマウント・プレザント市を一日間訪問し、ホームステイを通して生活体験をしました。滞在中は地元の交流委員会が企画したアクティビティーや、地元のお祭りに参加したり、

ミシガン湖へフィールドトリップに出かけたりしました。また地元のネイティブアメリカンのコミュニティを訪問し、年に一度のネイティブアメリカンの儀式を見学しました。また同年九月には、マウント・プレザント市の市民訪問団が岡谷市を訪問し、ホームステイを体験しながら、市内の各所を視察しました。また訪問団の希望で、地元の清掃工場や小学校、歯科医院なども訪問しました。

そもそもは岡谷市とマウント・プレザント市の高校生が文通をしていた縁から、姉妹都市交流へとつながりました。四〇年たっても変わらず、市民同士の草の根の交流がしっかりと根付いています。

(財)岡谷市国際交流協会

(財)岡谷市国際交流協会は、市民の国際理解を深め、世界に開かれたまちづくりを進めていくために、一九九二年に設立されました。「在住外国人施設見学・交流会」



↑高校生生活体験のウェルカムパーティー

岡谷市在住の外国人を対象として、毎年開催しています。岡谷市役所や消防署、蚕糸博物館、イルフ童画館、スポーツ施設など市内の各公共施設を見学し、外国人住民の方たちにも施設の存在や利用方法を知ってもらうために実施しています。日本語が分からない方でも気軽に参加できるように、中国語、英語、ポルトガル語などの各言語のボランティア通訳を用意しています。岡谷消防署では、消火器の使い方や緊急時の電話のかけ方についてアドバイスも

らったりしました。



↑施設見学会「岡谷蚕糸博物館」を訪問

「通訳・翻訳サービス」

通訳は、日本人との結婚に必要な書類(戸籍など)の翻訳、各種証明書、住民登録、手紙など、さまざまな文書を依頼に応じて翻訳しています。通訳は、各種交流会や訪問へのアテンドなどが主な依頼です。最近では病院からの依頼も増えています。

「外国人相談・インフォメーション事業」

年間約二六〇件の相談を受けています。日本語教室への問い合わせや、国際送金の手続きの方法など日常生活に関する相談から、在留資格に関する質問、結婚や離婚に関する問題、雇用契約に関するトラブルなど深刻な相談も寄せられています。相談は職員が、英語やポルトガル語、中国語で対

応しています。近年は日本人配偶者が増えるに伴い、結婚や離婚、日本人の家族とのトラブルなどに関する相談が多く寄せられるようになりました。

「オーストラリア語学研修・ホームステイ」

オーストラリアのシドニー郊外にあるセントレオス校（中高一貫校）へ生活体験語学研修の生徒派遣を実施しました。学校の授業にも実際に参加し、日本語を勉強している同校のホストスチューデントがお世話をしてくれました。

「国際座談会」

平成一七年度より毎年一つのテーマを決めて、在住外国人が討論する「国際座談会」を実施しています。平成一八年度は「いじめ」をテーマに意見交換をし、親子のコミュニケーションや愛情の大切さを訴える発言が相次ぎました。参加者はブラジル、中国、韓国、アメリカ、フィリピン、インドネシア、タイ、日本の八カ国一五人で、ほとんど日本語で議論を繰り広げました。同じテーマでもそれぞれの文化や習慣の違いから、意見の根拠が異なり、多様性を垣間見るきっかけにもなりました。

「多文化コミュニケーション講座」

ポルトガル語や中国語など外国語の講座を開いたり、在住外国人を対象とした日本語講座、さらにはシニア世代を対象とした英語教室などを開催しています。講師は、岡谷市在住の外国人市民や、海外より帰国した日本人市民、岡谷市国際交流協会の国

際交流員などが受け持っています。最近では日系ブラジル人住民の増加に伴い、地元の小中学校で学ぶブラジル人の子どもたちが増えたため、小中学校の教員がポルトガル語教室に参加する姿も目立ってきました。

日本語教室への需要は高く、特に昼間は働いている若い外国人が仕事を終えた後、夜間のクラスで熱心に学ぶ姿が見られます。日本語教室では、教材に身近な生活情報を盛り込んで、例えばゴミの出し方や広告の読み方など、生活ルールを学んでもらう場としても一役買っています。今春には日本語教師養成講座も開催する予定です。

ニューズレター「こんにちは おかや」の発行

日本語のほか、英語、中国語、ポルトガル語、インドネシア語で、季節ごとに年四回発行されています。このニューズレターは、外国籍市民に日本の文化や生活に役立つ情報を提供するためのものです。最新号の二〇〇七年秋号では、防災特集を組み、地震や津波、台風、土砂災害など災害に関する基礎知識や、災害時に使われる言葉の説明、避難するときに必要なもの、市内の避難場所などについて掲載されました。外国人市民の中には、これらの災害がまったく発生しない国から来ている人も多く、中には「地震」や「津波」という単語が母語に存在しないケースまであります。災害時に言葉や文化の壁から生じる不要なトラブルを招かないためにも、平常時から外国人住民を巻

き込んだ地域の防災計画が望まれます。

ブラジル学校 「あしなが学園」

長野県下にある七つのブラジル学校の内、最大規模を誇る「あしなが学園」は、二〇〇六年三月に、ブラジル政府から認可を受けました。学園ではブラジルで教員免許を持つ先生が三人勤務し、ブラジルの教育課程と同じ内容で、ポルトガル語で教育を行っています。ブラジル政府からの認可を受けたことで、ここで学ぶ子どもたちは、ブラジルに帰国した際もすぐに同じ学年に編入できるといわれています。これまでは日本で教育を受けて帰国した場合は、編入テストを受けなければならず、また大抵は実際の学年よりも下の学年に編入させられていました。

あしなが学園は、日系ブラジル人労働者の派遣会社が出資して五年前に始めた保育園が発端でした。子どもたちの成長に伴って、三年前から学校も開始し、現在、一歳から高校生まで、二七人の子どもたちが学んでいます。学園は日本の学校に入学したものの、日本語の授業について行けずに学校に行けなくなってしまうブラジル人の子どもたちの受け皿にもなっています。

一般科目はブラジルの教育課程にのっとり、ポルトガル語で行われていますが、日本語のクラスも週に二回設けています。しかし日本での滞在が長く日常会話は難なくこ

なす子どもたちでも、日本語の授業はやはり難解です。そのため学園では、イラスト入りの独自の教材を開発するなど、試行錯誤を重ねています。



↑ブラジル学校「あしなが学園」

子どもたちは日本に滞在していてもすぐにバイリンガルになるわけではなく、敬語や難しい用語を使った応用会話などは、本格的に勉強しなければ身に付きません。家庭ではポルトガル語を使用しているため、日本語もポルトガル語もどちらも十分に習得していない状態に陥ります。また、日本で生まれて日本の保育園に通った子は、日本語しか知らないため、学園に入學すると学習言語に苦労します。日本語もポルトガル語も、どちらも学ぶ重要性を訴えていかなければなりません。いずれ帰国するつもりが、結果として日本の滞在が延び、日本語を習得することは必要不可欠であるケースも多いのです。

学園と地元の保育園や小学校との交流は、まだ始まったばかりですが、盛んに行われています。地元の小学生が、ブラジルの子どもの日当たる一〇月二日に学園を訪問し、お互いのあいさつの言葉や踊りを教えあいます。

また、地元の国際交流NPOの協力で、

学園の子どもたちに浴衣の着付けや、書道などの日本文化を教えてもらったりしています。地元の御諏訪太鼓に挑戦したりもしています。ブラジル人の親たちは、仕事が忙しくなかなか日本や地元の文化に触れる機会を持つことができない中、子どもたちが積極的に地元との接点を持っています。また学園の子どもたちが地元のお祭りでサンバを披露したり、サッカー大会で活躍したりもしています。

取材で訪問した日は金曜日の午後でしたが、学園では金曜日の午後は授業がなく、子どもたちは映画を見たり、ゲームをやったり遊んだりしていました。今後ますます外国人住民の滞在の長期化、ひいては定住化が進む中、子どもたちの教育や進学は重要な問題です。子どもたちが母国と日本の二つの文化や言語を背景とする中で、それを障害ではなく強みと変えて成長していくように、地域社会全体の支援が必要とされます。

これからの展望

外国人市民とのさらなる共生を促進するために、まずは言葉の壁を取り払う一層の努力が必要です。そのために岡谷市と岡谷市国際交流協会がしっかりと連携し、地域の在住外国人を把握し、地道な事業を通じて、少しずつ接点を開拓しています。

岡谷市は二〇〇五年の水害で、大きな被害を受けました。水害や地震など、災害に

関する情報を提供し、非常時に備えることも必要です。防災訓練を実施して、広く外国人市民へ情報を伝えていくと同時に、災害時ボランティアの育成や多言語による情報伝達の支援ツールを作成するなど、行政や地域社会の連携と協力が不可欠です。また日ごろから外国人住民と地域住民が交流を深め、お互いが顔見知りになっておくことも重要です。

岡谷市は外国人登録者数が少数ながら、それ故に岡谷市国際交流協会や地域社会が、外国人住民と顔の見える関係を築き、生活支援も行っています。工業都市である岡谷市にとって、産業を支える担い手でもある外国人住民は、まさに地域の活力の源です。

取材の日は残念ながら雨でしたが、岡谷市は四季を通じて美しい自然を愛でることができ、日本を支える地場産業を誇るまちでした。外国人住民との共生で、その豊かな地域力を一層強固にし、発展を続けてほしいと思います。

末筆ながら、今回の取材にご協力いただいた岡谷市の関係者の皆さまに、深く感謝申し上げます。

〈協力〉

(財)岡谷市国際交流協会

ブラジル学校 あしなが学園

〈文責〉

(財)自治体国際化協会地域支援課

高野花子 (財)京都市国際交流協会派遣